令和五年度入学者選抜学力検査問題

（前期日程）

国　語

（注　意）

1　問題紙は指示があるまで開いてはいけません。

2　問題紙は本文一七ページです。答案用紙は三枚あります。

3　答えはすべて答案用紙の指定のところに記入しなさい。

4　字数制限のある解答欄への記入に際しては、句読点を一字と数えなさい。

5　問題紙と下書き用紙は持ち帰ってください。

一　次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

古池や蛙飛こむ水のおと　　芭蕉

俳句はつくづく短い。つくづく、というのは縦にしようが横にしようが哀しいくらい短いという(1)ケンソンであり、だからこそ果てしない可能性を秘めた巨大な器であるという自負でもある。今や世界中に知られ、《HAIKU》の代名詞にもなっている芭蕉の古池の句にしても、わずか十七音の言葉の断片にすぎないのに、古池というおぼろに広がる宇宙を(2)ホウヨウしている。

〔中略〕

ではなぜ俳句という世界最短の定型詩が日本で誕生したのか。日本の詩歌の歴史を省みると、長い詩から短い詩へという明らかな流れがみてとれる。古代の長歌（5・7を何度も繰り返す）、王朝時代の和歌（5・7・5・7・7）、中世の［ア］・連句（長句5・7・5と短句7・7を繰り返す）、この連句から俳句と［イ］（どちらも5・7・5）が生まれた。ここで重要なのは長歌であれ俳句であれ、どの型式も5・7の単位（ユニット）で組み立てられている点である。逆にいえば日本のすべての定型詩はいつでも5・7の単位にばらばらにすることができる。

〔中略〕

長から短へ、日本の定型詩を展開させてきた原動力はどこにあるのだろうか。考えられる三つの理由を挙げておきたい。

一つは詩歌を作る人々あるいは詩歌に関心のある人々に共通する教養の場が早い時期に成立し、その後も比較的安定していたこと。その最初の土台となったのは『古今和歌集』であり次は『源氏物語』だった。教養の場が同じならば伝えたいことを事細かに語る必要はなく、短い言葉で示唆するだけで足りる。受け取る側は短い言葉を聞いただけで相手の言いたいことすべてを了解する。和歌の歴史の中で幾度となく繰り返されてきた本歌取りはこの手法を(3)クシしていた。

和歌だけでなく時代は下って江戸時代初期、芭蕉の『おくのほそ道』でも同じ手法が使われている。

又、清水ながるるの柳は、葦野の里にありて、田の畔に残る。此所の郡守戸部某の、「此柳みせばや」など、折々にの給ひ聞え給ふを、いづくのほどにやと思ひしを、今日此柳のかげにこそ立より侍つれ。

A 田一枚植て立去る柳かな

那須野のいわゆる遊行柳のくだりである。芭蕉の時代、詩歌に関心のある人なら、いいかえれば『おくのほそ道』を読むほどの人なら、このくだりを読めば、芭蕉がここで下敷きにしている西行の歌をたちどころに思い浮かべることができた。

道のべに清水流るる柳陰しばしとてこそ立ちどまりつれ　西行（『新古今和歌集』）

芭蕉はここで西行の歌を長々と書き写す必要はない。「又、清水ながるるの柳は」と書きはじめ「今日此柳のかげにこそ立より侍つれ」と結ぶだけで「西行のあの歌だな」とわかる。西行の歌など心得ていて当然の古典なのだ。もし芭蕉が西行の歌の全体を引用していれば当時の読者にとっては野暮の骨頂。一部だけで歌を示唆するのが粋なのだ。この共通の教養の場がなくなった現代の読者はこうはいかない。「西行の歌が下敷きにしてあって」といちいち説明しなくてはいけない。

俳句が十七音で描くのもほんの断片である。読者はその断片から全体を想像する。言葉は短いほど粋である。これができたのは作者と読者が同じ教養の場にいたからである。俳句が極度に大衆化してしまった現代、共通の教養の場など失われてしまった。いきおい俳句はただの断片となるか、俳句の中に言葉を牛々と押し込んで説明せざるをえなくなる。B 現代の俳句がかつての活気を失っているなら大きな原因はそこにあるだろう。

日本の詩歌の短縮化を促した第二の要因、それは王朝時代末期から中世にかけて日本の文化が中国から伝来した禅の洗礼を浴びたことだろう。

〔中略〕

鎌倉時代、滅びゆく南宋を逃れた禅の高僧たちが次々に来日した。第一次世界大戦によって廃墟となったヨーロッパの知識人たちが移住したアメリカに似ている。京と鎌倉には禅の寺院が建ち、五山の制度が整えられる。以後、禅宗寺院と禅僧たちを中心に日本で展開することになった禅は宗教としてだけでなく思想(哲学)として日本人の生活、文化すべてに計り知れない影響を与えることになる。

禅のもっとも重要な点は、言葉では真理を捉えられないと考える点である。むしろ言葉を排除することによってしか真理にはたどり着けないと考える。禅は言語不信、少なくとも言語に対して悲観的な思想であり、その分、人間の行為や行動を重視する。一言で言えば不言実行、「あれこれいわず黙ってここに坐れ、座禅せよ」ということになる。

なぜ禅は言葉に冷淡なのか。それは言葉は論理(理屈)を編み出すが、真理は論理の彼方にあるからである。そこで禅において言葉が有用であろうとすれば言葉が論理から解き放たれなければならない。言葉は言葉と結び合うことによって論理の糸となるので、言葉を論理から解放するには言葉を分断して論理の糸を断ち切らねばならない。つまり禅において言葉は短くならざるをえないのだ。それが人を煙に巻くような短い禅語であり、つじつまの合わない禅問答である。

〔中略〕

日本文化は王朝時代末期以降、この禅の思想を全身に浴びることになった。日本の中世文化はこの禅の洗礼によって誕生した。大和絵のように豊満華麗なかつての王朝文化は水墨画のように枯淡(4)ユウゲンな中世文化に生まれ変わった。

春はあけぼの。やうやうしろくなり行く、山ぎはすこしあかりて、むらさきだちたる雲のほそくたなびきたる。

王朝時代、清少納言は『枕草子』をこう書きはじめる。ここには春の夜明けの東の空をうっとりと眺める清少納言がいる。三百年後、兼好法師は『徒然草』にこう書く。

徒然なるままに、日暮らし、硯(すずり)に向かひて、心にうつりゆく由無し事を、そこはかとなく書き付くれば、あやしうこそ物狂ほしけれ。

ここにつづられているのは一日中、何かを書いている自分に対する「徒然なるままに」「そこはかとなく」さらに「あやしうこそ物狂ほしけれ」という省察であり批評である。『枕草子』は賛美し批判するのに対して『徒然草』は賛美し批判する自分をはじめ人間を批評する。禅の洗礼によって随筆の書き方、書く人の姿勢はこれほど変わってしまった。

詩歌もまた禅の洗礼を受けて中世以降、一挙に短縮化、断片化が進む。しかし詩歌の短縮化、断片化を進めたのが教養の場や禅の洗礼だけであったなら、それは文化人だけの流行に留まったかもしれない。のちに俳句や川柳が国民的な文学となるには、もう一つ国民的な理由がなければならなかった。

『徒然草』は恐るべき本である。人間の心と行動に対する深い洞察に貫かれている。その第五十五段は日本文化つまり和の文化の本質を簡潔に言い当てている。

家の作り様は、夏を旨とすべし。冬は、いかなる所にも住まる。暑き頃、悪(あし)き住居は、堪へ難き事なり。

家は夏向きに建てるべきである。冬はどんな家にも住めるが、暑い季節に作りの悪い家に住むのは堪えがたい。兼好法師はこ

こでは家の建て方について書いているのだが、「夏を旨とすべし」という鉄則は家にかぎらず日本人の生活、文化のすべてに当てはまる。いいかえるなら日本文化とは夏向きの文化であり、涼しさを追求して生まれた文化なのだ。

日本はユーラシア大陸の東の果て、太平洋の西の端に浮かぶ島国である。この地理的な条件が昔からこの国にどのような気候をもたらしてきたか、日本に一年でも住んだことのある人なら誰でも知っている。冬の寒さ、雪の多さもさることながら、とりわけ日本人をげんなりさせるのは夏の蒸し暑さ、さらにいえば暑苦しさだろう。

〔中略〕

この蒸し暑い夏が毎年繰り返されるうちに、日本人は生活、文化のあらゆる面で夏を快適に過ごす方法、涼しく暮らす方法を探るようになった。兼好法師のいうとおり「［ウ］」とした和の生活、和の文化を作り上げてきた。

〔中略〕

では日本人は海の彼方から渡来する文化をどのようにして自分たちの文化に作り変えていったのか。その最大の鉄則となったのが兼好法師のいう「夏を旨とすべし」ではなかったか。それには受容、選択、変容という三つの過程があった。

第一に、海外から来たものはとりあえず何もかも受けいれること(受容)。鮟鱇(あんこう)の口のように門戸を大きく開いて日本の国に入ってもらう。この点、日本人は海外の文化に対して古来、好奇心旺盛だった。王朝時代は唐文化、中世は宋文化、安土桃山時代は南蛮文化、明治以降は西洋文化、戦後はアメリカ文化というふうに外来の文化に対して日本人は卑屈なまでに寛容であり、ドンヨク(5)に吸収しつづけた。

平安時代半ばの国風文化も純日本風文化だったのではない。遣唐使廃止といっても朝廷による使節派遣がなくなっただけで民間の交流はつづいていた。こうして国内に蓄積された唐文化の熟成が深まった、これが国風文化だった。江戸時代も鎖国政策をとりながら幕府や知識人の海外文化、情勢に対する関心は衰えることがなかった。日本の歴史のどこを切り取っても、そこには国際的な風景が広がっている。もし日本人は内向きの国民であると思われているなら、それは大いなる誤解といわなくてはなら

ない。

第二に、日本に迎え入れた文化の中から、この国にふさわしいものを選びとること(選択)。ここで威力を発揮するのが「夏を旨とすべし」という鉄則である。蒸し暑い日本の夏を涼しく過ごすのに少しでも役立つものは積極的に採り入れる。暑苦しいものはさっさと捨て去る。取捨選択のこの方針は徹底していた。

第三に、採り入れた海外文化をさらに「夏を旨とすべし」という鉄則に従って改良し、より涼しいものに作り変えた(変容)。日本人が衣食住すべてにわたって外来文化をいかに日本の夏に合うように作り変えてきたか、焼き直してきたか、数え上げれば切りがない。

〔中略〕

もっとも目覚ましいのは文字だろう。太古の日本には文字がなかった。人々は原初の日本語、大和言葉を話していたが、それを書き記す文字がなかった。四世紀の弥生時代に中国の漢字が伝来した。これが日本最初の文字である。しかし一字一字が意味をもつ表意文字の漢字で大和言葉をどう書きあらわすか。当時の日本人が考えたのは、まず漢字の音で大和言葉の発音を表す、いいかえれば漢字を日本語の発音記号として使う方法だった。次に漢字の意味を汲んでそれに相当する大和言葉に当てる。これが万葉仮名である。

八世紀半ばの奈良時代末期に完成した『万葉集』は、この万葉仮名で埋め尽くされている。

春過而夏来良之白妙能衣乾有天之香来山　　持統天皇

春過ぎて夏来るらし白たへの衣干したり天の香具山

漢字だけで書かれているのが『万葉集』の原典である。ひらがな混じりの表記と比べると、春過、夏来のように a

ところと、良之、能のように［　b　］ところが混在している。どちらにしても万葉仮名で書くと和歌も文章も漢字ばかりになる。しかも漢字はもともと釘のような鋭利な道具で金石や甲骨に刻みつけたものであるから、どれも棘々しく硬い。日本人は堅苦しい漢字がずらりと並ぶこの暑苦しさが我慢ならなかった。

平安時代初期、漢字の書き崩しからひらがなが、漢字の一部だけをとってカタカナが誕生する。飛びはねる若鮎のような、筆でそっと撫でたようなひらがなも、氷のかけらのような、削った竹のようなカタカナも漢字の万葉仮名に比べれば格段に［　エ　］い。日本人はこれが大いに気に入って、以後、漢詩、経典、公文書を除けばほとんどの文章、詩歌がひらがな、カタカナに漢字を混ぜて書くようになった。十世紀初めに完成した『古今和歌集』はひらがなと漢字で書かれている。

和の文化といえばすぐ和服、和食、和室など頭に和のつくものを思い浮かべるが、本来の和とは受容、選択、変容という三つの過程を繰り返しながら外来文化をこの蒸し暑い国にふさわしいものに作り変える創造力の運動体のことである。和服、和食、和室などはその運動体が生み出した、いわば遺物にすぎない。

日本人の生活、文化の歴史を振り返ると、ひらがな、カタカナにかぎらず、あらゆる分野で涼しさが追求された。その結果、誕生したのが「間」である。

C 間とは何もない時間や空間のこと。ただ一言でいうのは難しく、時間と空間以外、心理的な間、心の間としかいいようのないものもある。言葉でいいにくいのは間がそれだけ日本人の生活や文化に染み込んで渾然一体となっているからだろう。

空間上の間はわかりやすい。一間といえば家の一部屋のことだが、もともとはがらんとした何もない部屋をさしている。何でも入れられる空っぽの器が間なのだ。もっともふさわしいのは畳が敷いてあるだけの和室だろう。必要に応じて何でも置けるが、ふだんはすべて片づけて何もない。これが間である。英語ではスペース《space》である。家具や(6)調度を備え付けた西洋風の部屋は応接間などというものの本来の間ではない。あれは《space》ではなくルーム《room》である。

絵画における余白、空白もこれに近い。長谷川等伯の「松林図屏風」は松林が描かれているのではない。白くふくよかな間を表すために何本かの松が描かれている。西洋の絵画では空白は塗り残し、空白の多い絵は未完成と見なされる。神の完璧な創造物を模写して賛美するのが西洋画の役目であるから、神の創造物に空白はないと考えるのである。

時間上の間も難しくない。音や声の聞こえない沈黙の時間である。西洋の音楽では極めてかぎられるが、日本の音曲では間がふんだんに現れる。むしろ沈黙のところどころに音が聞こえるというほうが当たっている。

〔中略〕

先ほど引用した『徒然草』第五十五段にはつづきがある。

深き水は、涼しげ無し。浅くて流れたる、遥かに涼し。細かなる物を見るに、遣戸は、蔀の間よりも、明かし。天井の高きは、冬寒く、燈火暗し。造作は、用無き所を作りたる、見るも面白く、万の用にも立ちて良しとぞ、人の定め合ひ侍りし。

注目すべきは「造作は、用無き所を作りたる、見るも面白く、万の用にも立ちて良し」の部分。ここにある「［　オ　］」とは空間上の間のことだが、それこそ「見るも面白く、万の用にも立ちて良し」、つまり家づくりの要であるというのだ。

このいきいきと働く間を日本人が詩歌に採り入れたのは当然のなりゆきだった。中世以降、流行した連歌や連句は句と句のあいだの間を最大限に生かして展開する文学である。

草庵に暫く居ては打やぶり　　芭蕉
いのち嬉しき撰集のさた　　去来

さまざまに品かはりたる恋をして　　凡兆

浮世の果は皆小町なり　　芭蕉

芭蕉が門弟の去来、凡兆と巻いた歌仙「市中の巻」の一節である。三十六句つづける連句が歌仙である。芭蕉が描くのは一所不住の世捨て人。草庵を結んでもすぐに捨てて次の草庵を結ぶ。それに去来が付けるのは勅撰和歌集に選ばれた知らせを受けて涙を流して喜ぶ歌人の姿。そこに凡兆がその人は貴賤を問わずさまざまな相手と浮名を流した恋の猛者であると茶々を入れる。「いやいや、どんなに美しかろうと最後は私のようになる」と老いさらばえて放浪する小野小町その人がぬっと顔を出したかのような芭蕉の句。

人物と場面が次々に展開してゆく、それを可能にしているのは句と句のあいだの間である。この間を論理によって、つまり［カ］で説明しようとしても結局は無駄だろう。芭蕉や去来や凡兆がそれぞれ自分の直観で跳び越えなければならない。

俳句は連句の発句（最初の句）が独立して誕生した。そのとき連句の句と句のあいだにあった間を俳句は一句の中にとりこんだ。

最初にあげた古池の句に戻ろう。この句は俗に「古池に蛙が飛び込んで水の音がした」という意味と勘違いされているが、そんな句ではない。ある春の日、［　X　］。つまりこの句の中で現実の世界から聞こえた「蛙飛こむ水のおと」と芭蕉が心に想像した古池という異次元の二つのものが出会っているのだ。

現実と心という異次元のもの同士のソウグウ(7)、それを可能にしたのは「古池や」の切字「や」である。切字とは文字どおり句を切る言葉。「古池や」とここで句を切ることによって、かつて連句の句と句のあいだにあった間を一句の中に出現させる。この間が現実から心へ、心から現実への展開を可能にする。

俳句はたしかに5・7・5という言葉だけみれば世界でいちばん短い定型詩かもしれない。しかしその懐[8]には広大な宇宙が宿っている。

（長谷川櫂「涼しさの文化―俳句はなぜ短いか」『季刊 iichiko』二〇二二年夏号、六五～七三ページ、一部改変の上、引用）

（注）　現在の栃木県那須郡那須町にある柳。柳の精を成仏させた伝説があり、多くの文人が訪れた。

〔問一〕 傍線部(1)〜(8)について、片仮名を漢字に、漢字を平仮名に直しなさい。

〔問二〕 空欄ア〜カについて、本文中にある適切な言葉で埋めなさい。

〔問三〕 傍線部A「田一枚植て立去る柳かな」について、作者の考える解釈にしたがって言葉を補いつつ口語訳しなさい。

〔問四〕 傍線部B「現代の俳句がかつての活気を失っている」のはなぜか、作者の考える理由を六十字以上、八十字以内で説明しなさい。

〔問五〕 空欄a、bについて、次の①〜⑤の中から適切なものをそれぞれ選び、数字で答えなさい。

① 漢字の音を大和言葉の音に当てている
② 漢字の意味をわかったうえで大和言葉の音に当てている
③ 漢字の音を大和言葉の意味に当てている
④ 漢字の意味をわかったうえで大和言葉の意味に当てている
⑤ 漢字の意味をわからないまま大和言葉に当てている

〔問六〕 傍線部C「間とは何もない時間や空間のこと」とあるが、芭蕉の「古池」の句の中で「間」は何と表現されているか、その言葉を抜き出しなさい。

〔問七〕 空欄Xに入る内容について、三十字以上、五十字以内で述べなさい。

二　次の文章は、伏見天皇の側近くに仕えた中務内侍藤原経子の日記の一節です。これを読んで、後の問いに答えなさい。

宮内の御許に、親の親とも言ひぬべき人のもとより、月のたよりにと頼め侍るに、人々具して前渡りして見え侍るを恨みて、

偽と思ひながらも待ちかねつ寝ぬ世の月に影明くるまで

と言ひおこせたる返事を、「あまり直屋隠りならんもさすがなれば、忍びて返事遣はし侍るが、さるべき使もなきを、いかがし侍るべき」と言ひ合はする。X かひなからんもと思ひて、あらぬ様なる姿をして、夜も半ばに過ぎて暁近くなる程に行きて、御真屋を(a)局にしつらひたる蔀を(b)、忍びやかにうち叩けば、皆人寝たる気色にて、答ふる人もなければ、あまり事々しからんもいかがなど思ひわづらひてやすらふ程に、東の妻戸の方に、「叩く水鶏の」とうち詠むる声のすれば、Y それにやあらんと、理も過ぎて優しくも面白くも覚えて、声につきて、(c)遣戸に立ち添ひて月を眺むるなりけりと聞くに、まことに月を待つにはあらで、人待つ程のすさびにやと思ひやられて、うち叩けば、「誰そ」とも言ひあへぬばかりに開けたれば、何とは言はず、文をさし置くに、袖をひかへて外さず。恐ろしくあきれたる心地して浅ましけれど、騒がぬさまにもてなして、さりげなくやはらすべり逃ぐるに、(d)隈なき月に見ゆらん後手も恥づかしく、我ながら心浅かりける振舞も空恐ろしく案ぜられて、悔しく覚えて、心のうちに、

《和歌　Z》

人には言はぬ事なれば、よろづはあいなき心一つなり。

（『中務内侍日記』による）

（注）○宮内の御許――「宮内卿」という女房名をもつ経子の友人のこと。「御許」は女房に対する親しみをこめた呼称。
○親の親――ここでは、はるかに年が離れていることの比喩として用いられている。
○前渡り――立ち寄らずに前を通り過ぎること。

○直屋隠り――ひたすら家にひきこもること。そこから転じて、知らぬそぶりで黙っていること。
○言ひ合はする――「言ひ合はす」は「相談する」の意。
○真屋――棟から両方に葺き下ろす屋根、あるいはその形をした屋根をもつ建物のこと。
○水鶏――水鳥の名。その鳴き声はものを叩く音に似ているとされた。

〔問一〕 傍線部(a)～(d)の読みをそれぞれ答えなさい。

〔問二〕 傍線部X「かひなからんもと思ひて、あらぬ様なる姿をして」を、「かひなからん」「あらぬ様なる姿」の内容を明示しつつ、わかりやすく現代語訳しなさい。

〔問三〕 傍線部Y「それ」が指すのはなにか、本文中のもっとも適切な箇所を本文から一五字以内で抜き出しなさい。

〔問四〕 《和歌　Z》に入るもっとも適切な歌を、次の①～⑤の中から一つ選んで数字で答えなさい。

① 夜をこめて鳥のそらねははかるともよにあふさかの関はゆるさじ
② 水鶏かと疑はれつるまきの戸をあくるまでとはなに叩きけむ
③ さ夜ふけていなおほせ鳥の鳴きけるをきみが叩くと思ひけるかな
④ やすらはで寝なましものをさ夜ふけてかたぶくまでの月をみしかな
⑤ ただならじとばかりに叩く水鶏ゆゑあけてはいかに悔しからまし

三　次の文章を読んで、後の問いに答えなさい（設問の都合で送り仮名を省いたところがあります）。

真宗既東封、訪天下隠者、得杞人楊朴能詩。及召対、自言不能。上問「臨行有人作詩送卿否。」朴曰「惟臣妾有一首云、

更休落魄耽盃酒　且莫猖狂愛詠[X]

今日捉将官裏去　這回断送老頭皮。」

上大笑、放還山。[Y]

余在湖州、坐作詩、追赴詔獄。妻子送余出門、皆哭。無以語之、顧語妻曰「独不能如楊処士妻作詩送我乎。」妻子不覚失笑、余乃出。[b]

（注）○蘇軾（一〇三六～一一〇一）――北宋の文人、政治家。号が東坡居士。

（北宋・蘇軾『東坡志林』巻二「書楊朴事」による）

○真宗(在位九九七～一〇二二)――北宋の第三代目の皇帝。
○東封――東の泰山で封禅の祭りを行うこと。
○杞人楊朴――杞は今の河南省杞県。楊朴は当時の有名な隠者。
○妾――側妻。
○猖狂――熱狂する、狂ったように夢中になる。
○官裏――役人のいるところ、役所。
○這回――このたび。
○断送――送り出す。
○老頭皮――旦那様。当時の老年の男性に対する敬称。
○湖州――現在の浙江省湖州市。元豊二年(一〇七九)四月から蘇軾は湖州の知事だった。
○坐作詩、追赴詔獄――元豊二年(一〇七九)八月に蘇軾は詩文により朝政を誹謗したとして弾劾され投獄された。詔獄とは、御史台(官僚の取り締まりを行う官署)の獄のこと。この筆禍事件を烏台詩案という。
○処士――民間にあって、仕官しない人。

〔問一〕 傍線部a「自」、傍線部b「乃」について送り仮名を含む読み方を平仮名で答えなさい(現代仮名遣いで書いてもよい)。

〔問二〕 括弧[X]に当てはまる漢字を次のア～オの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 身　イ 賦　ウ 君　エ 唱　オ 詩

〔問三〕 傍線部Y「上大笑」について、なぜ真宗皇帝は笑ったのか、詩の内容を踏まえながら、説明しなさい。

〔問四〕 傍線部Z「独不能如楊処士妻作詩送我乎」について、蘇軾は楊朴の故事の縁起をかついだのであるが、蘇軾が妻に詩を求めた理由を楊朴の状況を踏まえて八〇字以内で書きなさい。